

山と博物館

第45巻 第2号 2000年2月25日

市立大町山岳博物館



「明けゆく木立の静けさ」谷川岳にて

撮影 大石高志

静——自然からの感性——

平林照雄

二十世紀は自然科学の進歩と、戦乱の時代といわれます。新世紀は人類の滅亡にかかる地球保護が課題だと思います。最近は地球的には予知できない天災や人災が相次ぎ、また人間不信が社会を苦しめています。その主な原因是地球そのものを知らずして、自然科学万能を奢ってきた結果です。人間の欲望のままに自然を改造し破壊してきました。人間も自然物の一員である謙虚さを忘れた自殺行為です。

自然から学びとれる感性は幼少の時ほど敏感です。純真で素直な感受性は、生活に翻弄されている大人社会に望んでも無理です。

特に子供と大人の社会が混同している現代では、果てしない宇宙への夢や、直接見ることのできない地球の神秘への関心をもたせたいのです。しかし新しい発見や知識は大切な進歩ですが、その裏に潜む予測できない逆効果は既に二千年問題で自明のことです。

何はともあれ私は恵まれた故郷の自然の懐で、自分で歩き、自分の目で見て、自分の考えで、しかも激変する時の流れに惑わされずに生きて来ました。現在の理科離れや進学や就職の苦勞は知りませんでした。これが社会的にどう評価されるかは別として、子供の時の豊かな感性の獲得が、社会人としての生き方の糧になつたのは確かだと思います。

小学校一年の時、北アルプスの麓を流れる純白の高瀬の河原で集めた「石ころ」が、後年鉱物岩石となり、地質学の授業や研究になり、地下資源の探査や自然災害の役に立つて生涯の支えにならうとは知りませんでした。人生は「何をやるか」より「好きなことを自分からやり続けること」だと思います。今になつて「人生は石に始まって石に終わる」の名言が、少しは理解できそうですね。

山仕事の古今（後編）

狩野清高

平成一年八月二七日から二九日にかけて、大町市教育委員会生涯学習課文化財係によつて同市鹿島集落の民俗調査が行われた。調査は国学院大学・倉石忠彦教授（同市文化財審議委員）と踏見学園女子大学・倉石あつ子助教授と学生らによる聞き取りを中心進められた。

その調査に一日参加し、実際に鹿島集落の方からお話を聞く機会を得た。その中でも山仕事のお話は大変興味深いものであった。

そこで同年一月三〇日、山との間わりについてあらためてお話をうかがうために鹿島集落へ足を運び、昔をよく知る狩野清高さん（大正二年三月一日生）を訪ねた。鹿島槍ヶ岳の麓に拓げる鹿島集落では、里山も含めた周囲の山々とどのように付き合ってきたのか。これはそこでお話をうかがうために内容を編集したものが、そこでお話をうかがうために鹿島集落へ足を運び、昔をよく知る狩野清高さん（大正二年三月一日生）を訪ねた。鹿島槍ヶ岳の麓に拓げる鹿島集落では、里山も含めた周囲の山々とどのように付き合ってきたのか。これはそこでお話をうかがうために内容を編集したものが、

（編集部）

1. 小屋掛け——坪半での食住——

山で炭焼きしているときには小屋掛けをし泊まつたです。泊まつた小屋つていうのは、一坪くらいでもんですねえ。間口が三尺、奥行きが六尺、そうするとだいたい一坪半か。そこで寝泊りをしてたで、そのくらいなけりやねえ。萱葺でね。山にある丸太で組んでね。最初はそんなトタンなんでものはなかつたでしょ、だから山にある萱から草から、それから木の皮。伐採した木の皮がむけるから、そういうものを利用して屋根を葺いてね。

こんだ（今度）昭和二〇年過ぎになつたらトタンがでてきたから、そなつたらみんなトタンを持ってきて屋根にしたんです。ただ、

3. 山が商売、「山の神」を怒らせない

山では沢ごとに大きな老木を見つけて「山

壁だけはトタンじやだめだつてことで萱でやつたり、木の皮でやつたりね。それで一番の入り口のところにちょっととした開炉裏を作つて、昔の鉤付様（自在鉤のこと）で、囲炉裏の上からつるし、鍋などをかけ、自由に高さを調節できる鉤）つていうかを下げる飯を炊いたりお湯を沸かしたりしてたんです。

2. 名前のない沢はひとつもない

山の中では全部沢ごとに名前が付いているからね。国有林内には複数の「リンパン」つていうのがあるんですよ。これは鹿島の谷、高瀬の谷、小谷の谷、白馬の谷、これ一帯でずっとリンパンがある。鹿島に「リンパン」から「六リンパン」まであって、爺ヶ岳のスキーパークが開場からちよつと上に来たところの東から一リバンパつていてね。その中に沢の名前が全部ついている。

例えは、「リンパン」の中にね「ミナミサルガジョウ」とか、「エンジャイリ」とか、「ナリサワ」とか。そういう名前は全部この辺の人人がつけたことだわね。これが全部沢々にあって、名前のない沢はひとつもない。沢ごとに全部あります。

だから、あの家はどこどこの沢、この家はどこどこの沢つていうふうに仕事する山を分けたんです。この辺の人は沢の名前を聞けば、どこの沢のことかわかつたね。



写真1. 鹿島神社（大町市平鹿島）

平安時代初期の大同元（806）年にこの地域一帯で大地震が起こり、これをきっかけに地盤除けの神様である鹿島明神をこの地に勧請したという。

の神」を祀つたけど、ないところはしようがないから、次の沢にあればそこへお祀りをしてやつたです。山が商売だから山の神様っていうのをまず第一に怒らせないように、これ山の神を祀つた木は尊敬して絶対に傷付けない。

この山へ入つてもだいぶ大きな木があればそこへ剣をあげたりして山の神を祀つたです。三mくらいの高さのところに剣を三本ほど釘で打ち付けてね。剣は鍛冶屋に作つてもらいました。あと、その木にお神酒と、米、塩、野菜、魚などの供物をあげて山へ入つたね。

4. 山での恐怖——川の氾濫・クマ・雪崩——

山に入つて一番怖かつたのは、この鹿島川が氾濫することだね。さあ、朝は山へ出て行つて泊まつて朝方に窓出しをしたところが、川が氾濫してて帰つてこられない。もうどうしても帰つてこられなくて、山の中をつたわつて鹿島橋まで降りてきて、そして渡つて帰つてくるとかありましたね。そりや、こんなことはあんまりなかつたがね。

あと怖かつたのはクマだ。秋なんかになるとクマを気をつけないと。クマはいっぽいたらかね。ただ、昔は自由に獲つてよかつたから、クマも警戒して今のようには出でこなかつたですよ。

それとこれは私のおじいさんから聞いた話だが、雪崩の恐ろしさがある。鹿島槍のカクネリの反対側に大沢つていう沢があつて、昔はここまで木を払い下げしていくもらつてたらしくてね。そのころ冬にこの部落のみんなでカモシカ狩りに山へ入り、その大沢で雪崩に遭つてしまつた。山をひとつ越えてきたほどの大きな雪崩だつたそうで、みんな亡くなつたという事でね。だけでも、私の家の本家にあたる人は、そのカモシカ狩りに行つてなかつたそううでひとり助かつたそうだ。まあ、そういう話も聞いたことがあるね。

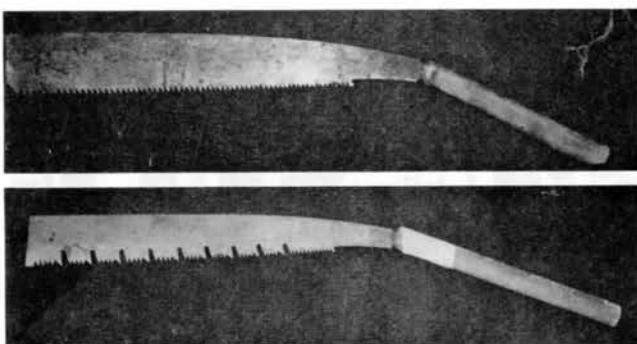


写真2. 山仕事で使った鋸（上・長さ92cm、下・長さ84cm）

こうした山仕事で使った道具は鹿島集落を訪れる行商人や市内の商店から手に入れた。写真の鋸は「尺八寸の鋸」という意味で「シャクハチ」と呼んだ。

5. 帳面で道具を手に入れる
山で使う道具つてのは、鋸（ノコ）とか鉛（ナタ）とか薙（トビ）で（写真2参照）、それを売りに来る行商人人が決まっててね。大町では今でもやっている島田の鋸屋。もとは大黒町に店があつて、ここのおじいさんが昔から鋸を持ってきちやあ売りさばいて。もうひとつ大黒町に西沢っていう鋸屋さんがあつて、ここの人人が鹿島部落との付き合いがじつと（いつも）あつた。それから諷訪あたりからも鋸屋さんが昔つから売りに来てました。

昔、この部落つていうのは帳面につけて物を買つてきて、お金つてものは一切払わなかつた。それこそ、イワシ一匹買うのにも魚屋へ帳面を持つて行つてつけてもらう。お金の買つてきの部落つていうのは帳面になつてました。もうひとつの部落つていうのは、お金つてものは帳面ができていてね。それで店の屋号ごとに帳面ができるてね。そこでこんだ、いよいよこの精算つていうのが旧年の一月。それまでに流していつた木を売り上げて、全部新との交換で精算をしたつてことだ。薪を納めていない店からは物を買わなかつたからね。もとも昔は薪よりほかに燃料がなかつたからね。

今考えてみるとまつたくでたらめつていうか、のんびりしていたもんです。店の方で鹿島の人ならいいですよって、いけないって言わないから物が自由に買えたね。さあ、それだから金も残らないわけだ。精算をした、みんな金は終わつちまつたつてね。まあ、終わつてもいいわけだ。また次の年になれば、ちゃんと帳面でつけてくれるから。まあそれも昭和七、八年の川流しをしたときだけのこととで、それ以後はこんなでたらめなことはだめだということでやめになつたがね。

6. 夜と冬の仕事は草鞋作り
自分たちが山仕事をするようになつてからは、もうほとんど草鞋（ワラジ）は履かなかつたね。その代わり冬は「シッペンソ」つていつてね、ワラの上と下を合わせたスリッパみたいな履物を作つて履いていましたがね。炭を焼くようになつてからは夏ほとんど地下

つていうものは全然持つていなかつて、呉服

でも酒でも何でもみんな帳面。まあ、信用があつたつてことでしようね。それだから、一年中金なんか払わないで鋸でもなんでも道具はどんどん手に入れて、そしてその年の終わ

りに木を売つてから金を払うようにしてね。

今の香典帳みたいな帳面になつていて、例え

ば魚屋なら「かねまさ」、呉服屋なら「ます

なお」、酒屋は「いのちのや」つていうよう

に店の屋号ごとに帳面ができるてね。それで

こんだ、いよいよこの精算つていうのが旧年

の一月。それまでに流していつた木を売り上

げて、全部新との交換で精算をしたつてこと

だ。薪を納めていない店からは物を買わなか

つたからね。もとも昔は薪よりほかに燃料

がなかつたからね。

こういうのは親から教わつてみんな自分で

作つて履いただね。大町へ行つて木を売り

さばいたときの夜の仕事がそれ。まあ大町へ

木が着いてしまうと、後は遊んでるようなも

のさ。昼間は木材を積んで売るところへ話を

して持ちに来つてもらつて、夜は何にも仕事が

ないから、夜のうちにその年で履く草鞋を作

つたりした。それから、冬の間は三月まで家

で休んでいたわけだから、その間に近所の人

が行つたり来たりして、草鞋を作つたり縄を

編んだりそつういうことをみんなやつた。

でも、自分たちになつてからは草鞋くら

いがね。

7. 庚申講の夜

こここの部落でやる講はね、「オカノイ仲間」

つていつて庚申講。これは今でも毎月やつ

います。うちの部落は一軒だから、一ヶ月

間抜かして一ヶ月毎月やる。それで昔は庚

（かのえ）申（さる）つていう暦の日に家回

りで全部やつていたんです。正月のときにく

じを引いて、例えれば私が三月引けば三月、と

いうように当たつた月になつたら当番でや

よ。

つたです。

それでね、その年最初と最後の講にあたる

初度（ハツド）と詰度（ツメド）というの

は、ご馳走をするんで金がかかる。毎年くじ引き

するから、同じ月が当たる人は何年も続けて

やるわけです。それをやつて、当時は女衆

がとても苦労するですよ。ご馳走を用意する

し、男衆はいつまでも二二時だらうが一時だ

ろうが酒を飲んでいて、それけんかする人

もいてね。もうこんなことはだめだでといふ

ことになつて、今は公民館でやつてますよ。

足袋。でも、私のおじいさんたちまでは、ほ

とんど草鞋だつたね。

それで炭焼に行くのにべらべらした薄い股引

（モモヒキ）、あれをみんな穿いたですよ。そ

して上はシャツ。ぼろシャツみたいなのを着

て。

そして雨具はカツバなんかなかつたから養

笠（ミノカサ）でね。作れる人は自分で作つ

て、そういう人は買つてくる。昔から大町

の「まるせ」の店からそういうものは買つて

きたがね。

こういうのは親から教わつてみんな自分で

作つて履いただね。大町へ行つて木を売り

さばいたときの夜の仕事がそれ。まあ大町へ

木が着いてしまうと、後は遊んでるようなも

のさ。昼間は木材を積んで売るところへ話を

して持ちに来つてもらつて、夜は何にも仕事が

ないから、夜のうちにその年で履く草鞋を作

つたりした。それから、冬の間は三月まで家

で休んでいたわけだから、その間に近所の人

が行つたり来たりして、草鞋を作つたり縄を

編んだりそつういうことをみんなやつた。

でも、自分たちになつてからは草鞋くら

いがね。

8. 「炭焼き」から「サラリーマン」へ

こここの部落の人気がいよいよ炭焼きをやらな

くなつてきたら、今度は部落の人ほとんどが

国有林の仕事に就くようになつたです。私は

昭和三一年からずっとその仕事を続けて、二

八年間山へ入りましたがね。その当時は部落

の人なら男でも女でも誰でも雇つてくれるつ

てよつた形で、一軒で何人でも国有林の仕事

に就いたね。

それでも一軒で大勢人手のあつた家は、ま

だ昭和三〇年過ぎころまでも炭を焼きまし

たですか。けども、ほとんどもう三五年ころか

らは炭焼きをする家はなくなりましたね。

そのころになると昭和電工つていう大きな工

場できたから、若い人はこんだみんな工場務

めのサラリーマンになつたつてわけです。

私はだつてもう年寄りですから、今まで話したことには間違つた点があるかもしれないが、まあ、これはあくまでも自分の聞いたこと、それとある程度経験したことです。それでたらめということはないと思いますよ。

（完）

北海道における猛禽類の現状 —ワシ類の鉛中毒—



写真 鉛中毒と判明した多数のオオワシ死体

彼らの本来の餌は、河川に遡上するサケや水鳥、海岸にうち上げられる海獣類の死体だつたと考えられます。現在はサケを河口で捕獲してしまったため自然遡上はほとんどなく、ワシ達は一時期、根室海峡で盛んだったスケソウダラ漁からこれ落ちる魚に頼って、羅臼町沿岸に集中していった時期もありました。

十年ほど前からこの漁にもかぎりが見え始め、ワシ達は再び新たな餌を求めて分散していきました。ちょうどその頃、北海道の内陸部ではエゾシカが増加し農林業被害が深刻になつたため、狩猟と駆除が盛んに行われるようになります。ワシはこれらの放置死体を新たな餌のレバー通りに加えたのです。

一九九五年頃から、内陸部で衰弱したオオシカの死体から生じた鉛中毒

北海道には雄大な自然が残されており、スケールの大きな猛禽類が生息しています。その代表はオオワシとオジロワシでしょう。しかしこれらのワシ類も、人間活動と全く関係なく暮らしているわけではありません。

ワシの生活の変遷

彼らの本来の餌は、河川に遡上するサケや水鳥、海岸にうち上げられる海獣類の死体だつたと考えられます。現在はサケを河口で捕獲してしまったため自然遡上はほとんどなく、ワシ達は一時期、根室海峡で盛んだったスケソウダラ漁からこれ落ちる魚に頼って、羅臼町沿岸に集中していった時期もありました。

十年ほど前からこの漁にもかぎりが見え始め、ワシ達は再び新たな餌を求めて分散していきました。ちょうどその頃、北海道の内陸部ではエゾシカが増加し農林業被害が深刻になつたため、狩猟と駆除が盛んに行われるようになります。ワシはこれらの放置死体を新たな餌のレバー通りに加えたのです。

一九九五年頃から、内陸部で衰弱したオオ

エゾシカでは広くライフル弾が使用されていて、ほとんどの弾丸は鉛を含有しています。その弾がシカに当たると、傷の周囲に碎け散つた鉛の破片が残留することも証明されました。銃創の周囲は食用にならないので山の中へ放置されることが多く、これをワシが食べて鉛中毒になつたのです。

計りしれない鉛の影響

さて因果関係が解明されたにもかかわらず、鉛中毒の被害にあうワシの数は年々増加を続けました。グラフに見るとおり、九八年度に発見された鉛中毒死は二十五件にも達しました。オオワシとオジロワシの生息総数はおよそ二千羽ですので、二十五羽はたいしたものでないと思われるかも知れません。しかし被害は深い山の中で起きていますので、発見される数は水山の一角であり、実際の被害数は正確にはわかりません。

そこで私達は、北海道で収容されたオオワシとオジロワシのすべての記録を集め検討しました。その結果九八年度に

は、驚くなれ発見されたワシの総死亡

数のうち約八割が鉛中毒死であることがわかつたのです。八割を占めると言うことは、言い換えれば「新たに鉛中毒が生じたために、ワシの死亡数が五倍にはね上がつた」ということなのです。これは

ワシやオジロワシが保護されたり変死体で発見されるなど、今まで見られなかつた奇妙な現象が起つてきました。九六年にはこれが鉛中毒であることが判明し、その原因はエゾシカの射殺死体を食べたことによるものと疑われました。

エゾシカでは広くライフル弾が使用され

ていて、ほとんどの弾丸は鉛を含有していま

す。その弾がシカに当たると、傷の周囲に碎

け散つた鉛の破片が残留することも証明され

ました。銃創の周囲は食用にならないので山

の中へ放置されることが多く、これをワシが

食べて鉛中毒になつたのです。

さて因果関係が解明されたにもかかわらず、鉛中毒の被害にあうワシの数は年々増加を続けました。グラフに見るとおり、九八年度に発見された鉛中毒死は二十五件にも達しました。オオワシとオジロワシの生息総数はおよそ二千羽ですので、二十五羽はたいしたものでないと思われるかも知れません。しかし被害は深い山の中で起きていますので、発見される数は水山の一角であり、実際の被害数は正確にはわかりません。

そこで私達は、北海道で収容されたオ

オジロワシのすべての記録を集め

検討しました。その結果九八年度に

は、驚くなれ発見されたワシの総死亡

数のうち約八割が鉛中毒死であることがわかつたのです。八割を占めると言うことは、言い換えれば「新たに鉛中毒が生じたために、ワシの死亡数が五倍にはね上がつた」ということなのです。これは

黒沢信道

—

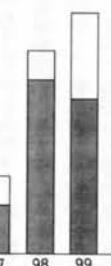


表 ワシ類鉛中毒発生確認数の推移
(1999年6月までに判明した分)

たいへんな数字です。

さらに研究者らは、中毒死だけが鉛の被害ではないと警鐘を鳴らしています。鉛には内分泌機能作用(いわゆる環境ホルモン作用)があると言われており、鉛を体内に吸収した場合、死に至らないような低濃度でも、繁殖能力が低下するなどの影響が考えられるとい

うのです。鉛中毒の影響は、現在明らかにな

つてない死亡の上に、更に将来にわたつてワ

シ類に重くのしかかって来ると考えられるの

です。

進む防止対策

行政やハンター組織もこの状況を重大にと

らえ、対策を始めました。

鉛中毒の防止には、当面ふたつの方法が考

えられます。ひとつは有害な鉛を含有しない

銃弾を使用すること、もうひとつはシカの死

体を野外に放置しないことです。ただし半矢

で逃げるシカも多いことを考えれば、第一の

方法だけではなく、第一の方法が基

本になることは明らかです。

現在シカの盛んな地域では、地元市町村

が不要死体の回収ボックスを設置してハンタ

ーに利用を呼びかけており、マナーの向上は

次第に浸透してきました。また北海道府

は、シカ獵での鉛製ライフル弾の使用を来年

秋より禁止すると発表しました。

ただ、これは言うほど簡単ではありません。

鉛の飛び散らない銃弾も急速に普及していく

が、弾丸の種類を替えると照準の再調整な

ども必要になつて、ハンターにも努力が要求

されます。また規制が守られているかどうかを調べていく必要もあるでしょう。

道外にもある鉛の危険

さて私達はこの二年間、鉛中毒に関係するいろいろな情報を得てきました。その中には、オオワシとオジロワシの他に、イヌワシやクマタカがシカの死体を食べている観察記録もあります。

幸い北海道では鉛弾の規制が始まっていますが、鉛汚染は北海道だけに限らないと私達は考えています。本州でもシカの増加や狩猟数の増大があり、その死体を餌とするワシ類が観察されています。鉛弾による猛禽類の汚染は、水面下で拡大しつつあるのではないかと思いま

す。ただ公式に報告がありませんので、環境庁でも対策に踏みきれないでいるようです。

私達は現在までに、死体であればとえ臼骨でも、また糞便からでも鉛汚染を知る方法を工夫しております。心あたりの方はご相談下されば、助言をさし上げられます。全国の猛禽類に忍び寄つて鉛中毒の危険を防止するため、何らかの手助けになれば幸いと考えています。

行政やハンター組織もこの状況を重大にとらえ、対策を始めました。

鉛中毒の防止には、当面ふたつの方法が考えられます。ひとつは有害な鉛を含有しない銃弾を使用すること、もうひとつはシカの死体を野外に放置しないことです。ただし半矢で逃げるシカも多いことを考えれば、第一の方法だけではなく、第一の方法が基本になることは明らかです。

現在シカの盛んな地域では、地元市町村が不要死体の回収ボックスを設置してハンターに利用を呼びかけており、マナーの向上は次第に浸透してきました。また北海道府は、シカ獵での鉛製ライフル弾の使用を来年

印 刷 奥 村 印 刷
発 行 平成 12年 2月 1日
398-1111-1111-1111-1111
北海道野生生物保護公社内 齋藤方
FAX 011-111-1111-1111-1111
(ワシ類鉛中毒ネットワーク代表)

山と博物館 第45巻第2号

平成 12年 2月 1日
398-1111-1111-1111-1111
北海道野生生物保護公社内 齋藤方
FAX 011-111-1111-1111-1111
(ワシ類鉛中毒ネットワーク代表)